亀中だより

No.42 令和5年2月24日 文責：岡田

For The Students！

「あなたの声、心に届け」
～ 第44回少年の主張全国大会より ～

国立青少年教育振興機構が主催する第44回少年の主張全国大会が、令和4年11月に開催されました。

この大会は、「中学生が日ごろの生活の中で感じた家族や友人、地域の人々に対する思いや感謝、あるいは感動をしたり、感銘を受けた経験、将来への決意などを自分の言葉で表現し、社会に向けて発表する場」（国立青少年教育振興機構理事長古川和さんの言葉より引用）として、昭和 54 年から始まりました。

今回はこの大会で「内閣総理大臣賞」を受賞した山梨県北杜市立甲陵中学校3年前橋真子さんの「あなたの声、心に届け」をご紹介します。生徒のみなさん、保護者のみなさん、ご一読ください。

「あなたの声、心に届け」

山梨県北杜市立甲陵中学校3年　前橋 真子さん

「真子ちゃん、きょうだいいるの？」「妹と弟がいるよ」「妹かぁ。羨ましいなあ」「羨ましいなんて…。私は妹の存在を口に出すのをためらうことがあった。

私の妹は生まれつき音が聞こえない重度難聴だ。左耳に音を増幅させる補聴器、右耳に脳に音の信号を送る人工内耳をつけている。発音も上手ではない。私が小学校のとき、「妹、障がい者なのに元気だね。」と友達に言われた。なんとも言い表せないモヤモヤが私の心に渦巻いた。障がいのある妹が明るく元気なのは普通のことではないと思い、恥ずかしさをおぼえた。そしていつの間にか妹のことを口にするのも、一緒に出掛けるのもつらくなった。

この春、中学校入学を控えた妹は、補聴器を新調した。私も一緒に店に行った。そこには色とりどりの補聴器が並んでいた。お店の方は、好きな色を選ぶように言った。私は「真紀ちゃん、黒か茶色を選んだら？」と勧めた。強く勧めた。黒か茶色なら髪の毛と同調して、

あまり目立たない。みんなと変わらない見た目でいられる。恥ずかしい思いをしなくてすむように、何度も言った。しかしそんな私を見て妹は言ったのだ。「誰になんと思われても、これは私の耳なの。私は黄色い補聴器の私を見てもらいたいの。」妹に言われてハッとした。障がいにこだわっていたのは自分自身だったのだ。

聴覚障がいのある妹が、明るく元気なのはおかしいのか。いや、妹は妹だ。妹が笑顔を絶やさないのは、今まで本当に沢山の努力をしてきたからだ。私と同じ小学校に行くために、人工内耳の手術を受け、手話が無くても友達と話せるように病院やろう学校に通って、発音練習を頑張っていた。誰にでも優しいのは、自分がされて嫌なことや辛かったことを痛いほどに知っているからだ。私は、今まで辛くて、悔しくて泣く妹を何度も見た。でもそのたびに努力してハンディキャップを乗り越えていた。そんな妹の努力を一番近くで見て知っているのは私だ。障がいというフィルタを通さず、ありのままの妹を見て欲しい。手話や口話、筆談、テレビの字幕も全部、社会と繋がるコミュニケーションツールの一部だ。それが妹の全てではない。

聴覚障がい者は、一度見ただけでは耳が不自由かわからず、接し方に戸惑うことがある。でも耳の不自由な人がみんな、相手に手話を望んでいるわけではない。聴覚障がい者が困っているときは、その人の正面から「何か伝えることはありますか。」と口を大きく開け、ゆっくり話しかけて欲しい。

「思いやりのある言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっとこだまする。」これは貧困や病に苦しむ人の救済に生涯を捧げた、マザーテレサの言葉。心のバリアフリーの精神を表している。まずは聞こえないことについて知ろうとして欲しい。その思いやりでどれだけ救われる人がいることだろう。

妹は毎日黄色い補聴器をつけ、お気にいりのテニスラケットを持ち元気に登校している。先日友達に「妹さん明るくて、部活のムードメーカーで、頑張っているよ。」と言われた。ありのままの妹を見てくれていると分かり心が温かくなった。そんな妹は、私の誇りだ。

私たちにできることには限りがあるかもしれない。それでもあなたの身近にハンディキャップを持つ人がいたなら、そのハンディというフィルタ越しではなく、その人自身や心に寄り添ってほしい。障がいのある人への理解が進むことで、一人またひとりと笑顔が増えていくと確信している。

妹の耳に、あなたの声は聞こえないかもしれない。でも、あなたの気持ちは妹の心に確実に、届いている。

前橋さんは、「この主張をどんな人に届けたいですか」という質問に次のように答えています。

「私はこの作品を、社会を生きるすべての人に届けたいです。この社会には様々な人が暮らしています。時に助けが必要なこともあるはずです。それを見過ごすことはとても簡単ですが、相手を理解したり、心のバリアフリーとして言動に移したりすることはとても勇気がいることです。この作品が一人でも多くの人の勇気を後押しできますように。その勇気が誰かの笑顔につながることを願います。この作品を書くにあたり、協力してくれた妹。妹の心にも私の声が届いていますように」

前橋さんは社会を生きるすべての人、つまり、今読んでくれているあなたにもこの主張を届けたいのです。あなたはこの主張をどう受け取りますか。前橋さんは、途中で「思いやりのある言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっとこだまする」と心のバリアフリーの精神を表したマザーテレサの言葉を引用しています。知ること、思うこと、言葉にすること、行動すること…。あなたの勇気が誰かの笑顔につながります。